流転の化物語

ゼクラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流転の化物語

【Ｎコード】
Ｎ２４１６ＢＡ

【作者名】
ゼクラス

【あらすじ】
この物語の主人公は本来の主人公ではない。まったくもって、関係のない人物が主人公である。しかし、本来の主人公は消えたわけではない。ただ単に、主人公が出会うべき出来事にその人物が、何の因果か出会ってしまっただけだ。だが、ただの人がその位置に居座る事は出来ない。その人物は、訳の分からない何かを持っている。そのものである。これはその人物が主人公の位置に移り変わっている。流転した、物語である。≪無欲な自分ほど灰より無意義なものはない≫

001　ひたぎクラブ - 流 -　其の壹

今の時間は何時だろうか？いつも身に着けている灰色の時計が無いから、正確な時刻がわからない。いや、今が何時だろうが遅刻しそうになっている事には変わらないな。遅刻しそうになっている身としては、この悪意としか思えない私立直江津高校名物（名物かどうかは知らないが）の無駄に長すぎる螺旋階段は、幼少の頃から身体能力が高いとはいえ、中々にキツイものだなと思う。

こんな無駄に長いものを建設するんであったら、その空間を他の事に有効活用してほしいものである。人が落ちたら大変だろうに――それはさすがにありえないか。

そして、階段をただひたすらに上がっていく単調な作業のような動きをしていると、思い出してしまう。あの決して忘れてはいけない地獄のような――いや、自業自得の日々を過ごした春休みを、悪夢のような現実のようなゴールデンウィークを、思い出してしまう。忘れる事を許されない、忘れてはいけない事をあらためて思い出してしまう。

そんな事を階段を上がりながら考えていると、空から人が落ちてきている事に気がついた。唐突すぎて、さすがに唖然としてしまった。よく見るとクラスメイトの女の子の戦場ヶ原さんだった。まるで某ジブリ映画の空から女の子が落ちてくるワンシーンのようだなと、詳しくも知らない事で自分は場違いにも例えていた。

というか、こんなくだらない事を考えている場合ではない。戦場

ヶ原さんは病弱だ――体育の授業には参加せず、全校集会や全校朝会にも貧血対策で日陰にいる。保健室の常連で、かかりつけの病院があり、遅刻や早退、欠席を繰り替えしている。自分が三年生からクラスメイトになる前からけっこう有名な話であった。

そんなまるで絵に描いたような病弱な戦場ヶ原さんがあの高さから落ちたら、言うまでなく怪我をしてしまうだろうな。もしくは死んでしまうかもしれない。大袈裟すぎるかもしれないが、それが戦場ヶ原さんに対する自分の見解であり――思いだ。

自分は持っていたカバンを捨てて落ちてくる位置に着き、戦場ヶ原さんを受け止めた。受け止めたはずだった。実際には受け止めた。戦場ヶ原さんの驚きに満ちたような眼が自分を映し出していたが、そんな事は気にならない。

自分は今、戦場ヶ原さんを普通に受け止めた。あの高さから落ちてきた戦場ヶ原さんを何事もなかったように受け止めれた。そして、何よりも自分が混乱している事は、戦場ヶ原さんが軽すぎた事だった。

戦場ヶ原ひたぎ、彼女には体重と呼べるものが、限りなくなかったのであった。

戦場ヶ原さんが、ただの病弱で儚げな女の子ではないと理解し、自分が今までに戦場ヶ原さんに対しての見解と思いが崩れ、変わった瞬間でもあった。

「戦場ヶ原さんについて、その、ちょっと教えてくれない？」
「戦場ヶ原さん？」

唐突な問いかけに、羽川さん……あ。さん付けはしなくていいって言ってたな。訂正。唐突な問いかけに、羽川は首を傾げた。

「戦場ヶ原さんが、どうかしたの、豪良（ごうら）くん？」
「えっと、三年生になって初めてクラスメイトなったんだけど、噂とかは耳に入ってくるけど実際のところどんな人かは知らないから、気になって聞いてみようと思っただけだよ」

少しどもって不自然だったけど、まぁ言い訳にしては及第点だな。でも――羽川はそれでも見破ってしまうだろうな。

「ふぅん」

……やっぱり、見破ってるな。

「――あと、戦場ヶ原ひたぎって珍しい名前だと思わない？下の

名前が特に」

自分が言えた義理ではないけどな。豪良絢爛（ごうらけんらん）。上も下も、戦場ヶ原ひたぎに負けず劣らずの珍しいマイネームだ。ハガキにペンネームとして書いて送っても違和感はないな。代償は自分の名前が痛い名前だと理解する事だけ。

「戦場ヶ原さんの名前って、そんなに変わってるかな……戦場ヶ原っていうのは地名性で、ひたぎは、土木関係の用語じゃなかったっけ？」

一般常識としてあたりまえのように、羽川は、平然と言ってのけた。このように、普通は知らないようなことを、羽川が言うときに自分は決まって、ある一連の流れをする。

「羽川は何でも知ってるよね」

こう言うと――

「何でもは知らないわよ。しってることだけ」

――こう返ってくる。羽川翼。クラス委員長の彼女のお決まりの名台詞だ。一つ言っておこう。羽川はただのクラス委員長じゃない。三つ編みに眼鏡をかけて、清く正しく真面目に生き、教師受けも良く、委員長の中の委員長なのだ。真面目な委員長などは漫画やアニメ、現実でもだいたい、良い子ちゃんぶってんじゃねーよってきな感じで虐げられたりするものである。しかし、羽川はそれを起こさせないほどの真面目っぷりだ。五教科六科目で百点満点なんてのを出すくらい真面目で、今まで嘘をついた事が無いと言えるほどに真面目である。それ故に羽川は委員長の中の委員長なのだ。断言でき

る。

「文化祭って言っても、私達、もう三年生だからね。さしてすることもないんだけれど。受験勉強のほうが大事だし」

自分もその意見に賛成だ。三年にもなると一年のときとは色々と違ってくるしな。というか、今更だが五月八日の放課後、ゴールデンウィーク明けに自分達は文化祭について話をしている。なぜ自分がクラス委員長の羽川と文化祭について話ているかというと――。

「今更だけど、何で自分が放課後に残って文化祭の計画をしないといけないんですか。羽川委員長」

「きみを更生させるためだよ。豪良副委員長」

――と、言うのだった。自分はなりたくなかったのに副委員長にさせられ、羽川が「きみを更生させてみせます」と、宣言をし、更生させようとしているのである。羽川の中では、自分は更生すべき人物として確定してるらしい。自分は問題児でも不良でもないだろうに――多分だけど。更生させるべき人物は他にいるでしょ。

「更生させるなら自分ではなく、暦くんのほうじゃないか？」

「阿良々木くんは、きみがいるから大丈夫でしょ。豪良君」

羽川は、確信しているがごとく言う。

「自分は暦くんの保護者じゃないんですよ……」

友達ではあるけど。阿良々木暦。自分は暦くん（本人はそう呼ばれるのを嫌がっている。昔からの呼び名は今では恥ずかしいらしい）と呼んでいる。ご近所さんで幼馴染であるため、昔から阿良々木家

とは付き合いがあり、お世話になっている。自分が暦くんを更生させるべき人物と言うのは、色々と込み入った理由があるが、その一つにあいつは友達が羽川と自分を含めて二人しかいないと言えば分るだろう。その原因は暦くんと自分の、軽すぎる単純な動機で動いた結果のせいなのだが、それは追々語っていくだろう。

「――はぁ、愚痴を言っててもしかたないし、文化祭の話をしますか」

愚痴というか、うちわ話というか、ただの世間話である。

「そうだね。じゃあ、出し物から決めていこうか。漠然としたアンケートじゃ意見がばらけちゃって時間がもったいないから、あらかじめ私達が候補を絞っといて、その中からクラス選ぶってので、いいかな？」

「それでいいと思うよ。出し物は変にチャレンジしたものよりも、万人受けするような平凡なのがいいとおもうよ。そのほうがこっちも楽しめると思うし」

「そうすると、お化け屋敷や喫茶店とかが定番になってくるね」

「だろうね。去年も一昨年もそんな感じだったしな……あ。そう言えば暦くんが、去年も一昨年も戦場ヶ原さんは文化祭に参加していないって言ってたな」

暦くんが言うには、他の行事でも参加していないらしい。体育祭は言うまでもなく、社会科見学、修学旅行、野外授業、全ての行事に参加していない。激しい運動をしないものにも、参加はしていないらしい。これは病弱だからの一言で片づけるのはいささか無理がある。だけど、あの体、体重が全くもってないようなあの体なら話が付く。人を避け続けている行動にも納得がいく。

「そんなに気になるの？戦場ヶ原さんのこと」
「あー、まぁ、そうかな」

あんな事があって、気にならい奴なんていない。得に自分にとって、戦場ヶ原さんの軽さは錯覚などで誤魔化せるものじゃない。あれは、自分のそれらと同類だ。

「やっぱり、豪良くんもアレだけど男子だもんね。病弱な女の子、男子は好きだもんねー。あー、やだやだ。汚らわしい汚らわしい」

からかうような、変わったテンションでいう羽川。

「さりげなく、自分のやや中性の顔とアレな所を弄らんでくれ」

中性でも童顔でもない、女よりも男よりで、やや中性である。断言できる。アレに関しては否定はしない。遠回しに言ってくれた配慮にはありがたいけど。

「あはは、ごめんごめん。でも、阿良々木くんに聞いたなら私に訊かなくてもいいんじゃないかな？なんったって、三年連続で同じクラスだっていうんだから」
「暦くんも自分とたいして変わらない情報しか持っていなかったよ——何より、異性よりも同性の方が知ってると思って訊いたんだよ」

羽川が知っていることの中には、クラスメイトのことは入っているだろうしな。

「確かに、異性よりも同性のほうが知っていることが多いとおもうけど、それをおいそれと教えてあげるわけにゃいかないでしょう

が、異性の豪良くんに」
「うん。そりゃそうだね」
少し呆れるような感じで言われた。少しばかりデリカシーの欠ける問いかけだったな。訂正しよう。
「じゃあ、クラスの副委員長が、クラスメイトの戦場ヶ原さんをどうにかしようと思って、クラスの委員長に質問していると思って答えてくれ」
「そうくるか」
羽川はそう言うと、さきほどから話をしながら書いていた走り書きを止め（出し物の候補などを書いては消しをしていた）、ふぅむ、と考える素振りをし、手を束ねた。
「ああ、でも優等生とか、頭がいいとか、そういう自分でも分かるようなこと以外のを教えてくれ」
それくらいのことは暦くんからも聞いたしな。
「う～ん、そうなってくると豪良くんとたいして変わらないと思うよ。同じクラスになって、丁度一ヶ月くらいだしね。ゴールデンウィーク、挟んじゃってるし」
「――それでもいいから。知ってること、思ってることだけでいいから話してくれ」
ゴールデンウィークはタブーだ。あまり、会話に出すものではないな。自分はそう見解をしている。
「じゃあ、話すね。戦場ヶ原さん、口数も多いほうじゃないし、

友達も、全然、いないみたい。色々と、声をかけてはみてるけど、彼女の方から、壁作っちゃてる感じで――」

「まぁ、だろうね」

あの様子じゃ、この一か月でクラスメイトと話したことは、一言、二言もないだろうな。それでも、色々と声をかけているのは、さすが羽川と、言わざるをえないな。

「あれは――本当に難しいわ」

羽川に、そこまで重く判断されるということは――本当に重いことなのだろうな。

「やっぱり病気の所為なのかな。中学生のときは、もっと元気一杯で、明るい子だったんだけどね」

「えっと、羽川は、戦場ヶ原さんと同じ中学校だったのか？」

「え？あれ、それを知ってて私に訊いたんじゃないの？」

さも驚いたような表情を浮かべた。初耳だ。というか、自分は羽川のように何でも知ってるわけではないので、羽川の基準で考えられても困る。今だに彼女は、自分のことを『ちょと真面目なだけが取り柄の普通の女の子』と、思ってるらしい。いい加減、自覚してほしいものである。自身が正しすぎることを。

「うん、そうだよ。同じ中学校出身。公立清風中学。もっとも、同じクラスだったことは、やっぱりないけれど――戦場ヶ原さん、有名だったから」

羽川も、今と変わらず有名だったろうな。

「すごく綺麗だったし、運動もできたから」
「運動もってことは、何か部活をしていたのか？」
「陸上部で、スターだったんだよ。記録も、いくつか残っているはず」

今とは、まるで真逆だな。想像してもしっくりこないな。

「だから、話だけなら、色々聞いたもんだったよ」
「どんな話？」
「すごく人当りのいい、いい人だって話。わけ隔てなく誰にでも優しいって、そこまで言えば言い過ぎじゃないのかってくらい、いい人で、しかも努力家って話。なんか、お父さんが外資系の企業のお偉いさんらしくって、おうちもすごい豪邸で、すごいお金持ちなんだけれど、それでも全然気取ったところがないんだって話。高みにあって、更に高みを目指しているって話」
「まさに、完璧超人って奴か――全部、当時の話だろうけど」

今は、その話の面影を一切感じられない。

「そうだね。高校に入って、身体を壊した、みたいなことは、一応、聞いてはいたんだけれど――それでも、だから、実を言うと、今年、同じクラスになって、びっくりした。間違っても、あんな、クラスの隅の方にいる人じゃなかったはずだもの」

私の勝手なイメージの話だけれど、と羽川。そのイメージは、話を訊くかぎりはあっているだろうな。野球に命をかけた人が、肩を壊し、二度と球を投げ、バットを振れなくなれば。サッカーに人生を尽くした人が、足を壊し、二度と大地を駆け、ボールを蹴れなくなれば。そんなことになれば、誰だって変わってしまうだろう。戦場ヶ原さんだって、陸上部のスターだったのだから、そうだろう。

それが、ただの病気なら、今朝のことがなければ、そう言えただろう。

「でも――こんなことを言っちゃいけないんだろうけど、戦場ヶ原さん」

「どうかした？」

羽川は、珍しくどもって言った。

「うん。今の方が――昔より、ずっと綺麗、なんだよね」

「――それは」

「存在が――とても、儚げで」

存在が儚げ。それは一見、不謹慎な発言にみえるが。戦場ヶ原ひたぎ。軽すぎた彼女のことを表すのに、十分過ぎるほどに、的確な見解である。断定できる。

「――あっ。そういえば、自分、忍野さんに呼ばれてるんだったな」

「え？忍野さんに？何で？」

「――仕事の手伝い、だ」

「ふ、ううん？」

羽川は微妙な反応を見せる。さすがに露骨すぎたな。これじゃ赤点ものだ。そもそも、羽川に嘘（まるっきり嘘というわけでもない）をつくこと事態、無謀だな。

「そういうわけで、自分、そろそろいかなといけないんだ。羽川、今度埋め合わせするから、後のこと、頼んでいいかな？」

自分は席を立ちながら、やや不自然に続けた。

「そう言うなら、今日はいいわ。大した仕事も残ってないし、今日は勘弁してあげる。忍野さんを待たせても悪いしね」

羽川は、それでも、そう言ってくれた。忍野さんの名前が聞いたみたいだ。自分にも、羽川にとっても忍野さんは恩人だしな。その辺りも計算しての発言だったけど。

「じゃあ、出し物の候補は、私が全部決めちゃっていい？後で一応、確認だけはしてもらうけれど」

「うん。羽川が決めるなら大丈夫だろうし、任せるよ」

「忍野さんによろしくね」

「しっかりと伝えておくよ」

そう言い、自分は教室から出た。

教室から出て、扉を閉め、歩き出すと、

「羽川さんと何を話していたの？」

と、背後から声を掛けられた。その声は聞いたことがある。今日も聞いた、授業中に教師に当てられて発する、『わかりません』と、同じ声だ。そして、その声の主に向けて振り向く。

「戦場が――」

「動かないで」

戦場ヶ原さん――と、振り向き、言おうとしている最中に、静止の言葉をなげかけられた。そして、狙い澄ましたように、自分の口腔内に、伸ばしきったカッターナイフの刃を入れられた。自分の左頬内側に、それが凶器として触れている。

「はらっ……！」

「ああ、違うわ――『動いてもいいけど、とても危険よ』というのが、正しかったのね」

予想外すぎる。普通にカッターナイフを口腔内に入れてきたな。こいつ。加減せず、乱暴にもせず、ぴたりと刃を口腔内に触れている――手馴れている？自分に冷えた目を向け、揺るがずにそんな真似ができるとはな。戦場ヶ原ひたぎ。動いたら、本当にやるだろう。断定したくないな。

「好奇心というのは全くゴキブリみたいね――人の触れられたくない秘密ばかりに、こぞって寄ってくる。鬱陶しくてたまらないわ。神経に触れるのよ、つまらない虫けらごときが」

「……まて。落ち着いて――」

落ち着いて？自分は、何を馬鹿なことを言ってるんだ。落ち着いて考えろよ。戦場ヶ原ひたぎは普通に、あたりまえのように脅迫しているぞ。冷静さを失うな。焦らず考えろ。

「私は落ち着いてるわ。それより、何？右っ側が寂しいの？だったらそう言ってくれればいいのに」

思考させる余地もなく、戦場ヶ原ひたぎは左手に――ホッチキスを持ち、空いている左側の頬に差し込んできた。綴じる形で、緩く――挟まれる。

「か……」

薄くて鋭いカッターナイフを口腔内に差し入れて口を開けさせ、すかさず相手が発言をする前にホッチキスを入れる――計画的犯行としか考えられない、計算された手際の良さだ。まるっきり、相手のペースだ。行動できない。

「全く私も迂闊だったわ。『階段を昇る』という行為には人一倍気を遣っているというのに、この有様。百日の説法屁一つとはよく言ったものだわ」

そんな知らなくてもいい、難しい言葉を使いこなせるほど賢いなら、武力ではなく知力を使って、穏便に済ましてほしかったな。人らしく。

「まさかあんなところにバナナの皮が落ちているだなんて、思いもしなかったわ」

「……」

自分はバナナの所為でこんな目にあっているというのか。自分はバナナが好きでも嫌いでもなかったが、大嫌いになりそうだ。

「気づいているんでしょう？」

戦場ヶ原ひたぎは自分に問う。目つきは剣呑なまま、問うてくる。

「そう、私には――重さがない」

体重が、ない。人との身には考えられないほど、軽い。

「といっても、全くないというわけではないのよ――私の身長・体格だと、平均体重は四十キロ後半今日というところらしいのだけれど」

受け止めたときに感じたものには、そんな重さ、微塵も感じられなかった。

「でも、実際の体重は、五キロ」

軽い。生まれたばかりの赤ん坊と、そう変わらない。それが人間一人に分散しているなら――実感としては、体重がないのと等しい。自分が受け止められたのも、当然だろう。

「まあ、正確を期すなら、体重計が表示する重量が五キロというだけなのだけれど――本人としては自覚はないわ。四十キロ後半強だった頃も、私自身は、今も、何も変わらない」

人間がその大きさで五キロというのはありえない。世界の常識で考えると、数学やらの問題になってくる。だが、これはそういう常識の問題じゃない。

「何を考えているかわかるわよ」

「……」

「胸ばかりみて、いやらしい」

「……」

そんなことは考えていない。断定できる。劣情は自分にはない。三者混合の自分には。

「底の浅い人間はこれだから嫌になるわ」

劣情以外に関しては、自分は底の浅い人間だな。その結果が今の自分なのだから。

「中学校を卒業して、この高校に入る前のことよ」

戦場ヶ原ひたぎは言った。

「中学生でも高校生でもない、春休みでもない、中途半端なその時期に――私はこうなったの」

「……」

「一匹の――蟹に出会って」

蟹――あの海にいる、冬に食べる蟹のことだろう。動物としては、自分のも似たようなものだろう。

「重さを――根こそぎ、持っていかれたわ」

「……」
「ああ、別に理解しなくていいのよ。これ以上かぎまわられたらすごく迷惑だから、喋っただけだから。豪良くん。豪良くん――ねえ、豪良絢爛くん」

戦場ヶ原ひたぎは。役者のような言い回しで、自分の名前を、重ねて、呼んだ。

「さて、私は、あなたに私の秘密を黙っていてもらうために、何をすればいいのかしら？私は私のために、何をすべきかしら？『口が裂けても』喋らないと、豪良くんに誓ってもらうためには――どうやって『口を封じれば』いいかしら？」

カッターナイフとホッチキス。どちらか、それとも両方ってか？正気で狂気だな――こいつ。だが、それを行ってしまうほどに、戦場ヶ原ひたぎにとっては、長かったのだろうな。高校生になってから、ずっとそうだった、というのは。自分は年期に関しては、それ以上だが――思いがちがう。戦場ヶ原ひたぎと自分とでは、受け止め方も状況もちがう。生き方も――ちがう。

「同情してくれれるの？お優しいのね」

戦場ヶ原ひたぎは、吐き捨てるように言った。同情はしていない。共感はしたが。

「でも私、優しさなんて欲しくないの」
「……」
「私が欲しいのは沈黙と無関心だけ。持っているならくれないかしら？女の子のような綺麗なほっぺた、大事にしたいでしょう？」

戦場ヶ原ひたぎは。そこで、微笑んだ。

「沈黙と無関心を約束してくれるのなら、二回、頷いて頂戴、豪良くん。それ以外の動作は停止でさえ、敵対行為と看做して即座に攻撃に移るわ」

本気の発言であることは、その目を見ればわかる。自分は二回、確かに頷く。

「そう」

戦場ヶ原はその選択に安心したようだ。選択の余地がこちらにはなく、同意しか残されていないにもかからわず――自分がそれに応じたことに、安心したらしい。

「ありがとう」

戦場ヶ原ひたぎはそう言って、カッターナイフを、誤って口腔を傷つけないようにと、ゆっくり、緩慢な動作で、抜く。配慮はしてくれたような手つきだった。抜いたカッターの刃を仕舞い、そして、ホッチキスを。

「……あがっ！？」

がじゃこっ、と。ありえないことに。ホッチキスを――綴じた。自分はその痛みに反応して、その場に、膝をつき、頬を抱えるように押さえた。

「う……ぐ」

「悲鳴を上げないのね。立派だわ」

どうでもいいように――戦場ヶ原ひたぎが、上から言った。見下すように。虫ごときを見るように。

「今回はこれで勘弁してあげる。自分の甘さが嫌になるけれど、約束してくれた以上、誠意をもって応えないとね」

「……」

何も言わない。これ以上、何か発言しても、己が状況を悪化させるほかならない。

「それじゃ、豪良くん、明日からは、ちゃんと私のこと、無視してね。よろしくさん」

そう簡潔に言い、戦場ヶ原ひたぎは、用済みと言わんばかりに、自分に目もくれずに、そのまま廊下を歩いていった。そして、角を折れて、その後ろ姿が見えなくなると、自分は無言で立ち上がる。

「……」

自分は、口腔内にあるホッチキスの針を、手を入れて、確認し、迷いなく、そのまま引っこ抜く。血は少ししか出ない。

「く……」

このぐらい大丈夫だ――半分以上しか感じない。針が完全に綴じず、コの字で刺さってたのが幸いだったな。綴じてようが、開いていようが、あまり自分には関係ないが。どっちにしたって、感じる痛みは大差ない。抜いたホッチキスの針を折りたたみ、ポケットにしまう。証拠は隠さないとな。

「あれ？豪良くん、まだいたの？」

教室から、作業が終えたらしい羽川が出てきた。グッドタイミングだ。戦場ヶ原ひたぎとの、一方的な話し合いの最中に出てこられたりしたら、自分が声を抑えていたことが、無駄になるところだった。

「忍野さんのところ、早くいかなくていいの？」

何も気づいていないようだ。これは自分が声を抑えていたからなのか――あれほどの事をやってのけたに、羽川に悟らせない、戦場ヶ原ひたぎの手際の良さなのかは、わからないな――後者だろうけど。

「今からいくよ――羽川、バナナを階段で食べたことある？」

「え？いや、食べたことないけれど。そもそも、階段で食べるようなお行儀が悪いことしないよ」

「羽川さん、愛してるよ！」

「ええっ！？」

「そんじゃね」

そう言って。羽川が自分の突拍子もない発言に、戸惑っている間に、羽川の横を抜け、駆けだした。「えっ、あっ……。あー！こ、こら、豪良くん、からかったね！あと廊下を走っちゃ駄目！先生に言いつけちゃうよ！」と、羽川の委員長らしい声、が後ろから聞こえるが、聞こえない。スルー。あれ以上話していると、悟られかれないしな。

駆ける。そのまま、駆ける。角を折れたところには、階段がある。

戦場ヶ原ひたぎが降りたであろう、階段がある。ここは四階だから、たいしては離れてはいないだろう。現に、微かに軽い足音が、聞こえる――幽かに、聞こえている。そのまま三階、二階、と駆け下っていき、そして二階から一階への階段の途中に。いた。既に、自分に気づいていて、振り返っている。

「……呆れたわ」

そう、冷めた目で言いはなった。

「いえ、ここは素直に驚いたというべきね。あれだけのことをされておいて、すぐに反抗精神を立ち上げることができたのなんて、覚えている限りではあなたが初めてよ、童顔のくせに、根性はあるみたいね。豪良くん」

「……」

覚えている限り。高校生になってから、今現在まで。知った者全てに――脅迫し、傷つけ、拒絶してきたのか。戦場ヶ原ひたぎは――忘れてしまうほどに。生き方。思い。受け止め方。自分とは――全く違う。戦場ヶ原ひたぎに対する、あらたな見解が生まれた。

「……何か言葉を発したらどう？それとも、口の中が痛すぎて、喋れないのかしら。それなのに、何も考えずに追いかけてきたなんて、愚かとしかいえないわね」

「……」

無言で、無表情で、見る。

「……そう。いいわ。分かった。分かりました、豪良くん。『やられたらやり返す』というその態度は私の正義に反するものではあ

りません。だから、その覚悟があるというなら」

戦場ヶ原ひたぎはそう言い、両腕を広げた。その両手には、カッターナイフとホッチキスという、脅しに使用したものを始めに、多種多様な――凶器という名の文房具が、握られていた。そして。

「戦争を、しましょう」

宣戦布告をした。血の気の多い――いや、それにしては冷静すぎるな。現実主義。リアリストってところか。こういう奴は、思考させるような曖昧で的確な言葉を言い、確かな証拠を示さないと、けっして、理解も納得もしない。戦場ヶ原ひたぎ。彼女を説得するための言葉と証拠は既にそろっている。そして、自分は初めて戦場ヶ原ひたぎに対して、言葉をなげかけた。

「不思議とは思わなかったかな？自分を見たとき。やや灰色がかったこの髪ことを。こんな髪をしている自分は異常だ。普通では、ありえない――きみの軽さのように、ありえない」

「……何が、言いたいの」

戦場ヶ原ひたぎは、戸惑ったような、困惑したような――考えるような表情をした。あとは、証拠を示すだけだ。そして、その証拠は、戦場ヶ原ひたぎが用意してくれた。

自分は、唇の右端を指で引っ張り、右頬の内側を、晒した。

「――え？」

戦場ヶ原ひたぎは、驚いたようだった。ぽろぽろと、文房具を落とし、文房具という名の武装を解いた。

「あなた――それって、どういう」

ホッチキスの針が刺さって出来たはずの、口の中の傷は、無かった。跡形もなく、治っていた。

「自分は、戦場ヶ原さんと同じだ。そして、救われている。自分は戦場ヶ原さんの力になれる。断言できる。話――聞いてくれるかな？」

コンプリート。救われているというのは、少しばかり着色しているが、とりあえずは停戦できたな。武装解除もできた。あとは、和平を結び、先進国さんからの、自分達こと発展途上国への支援を得るとするか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2416ba/

流転の化物語

2012年1月6日01時45分発行